

十九世紀イギリス小説の Setting について (その一)

The Setting of the English Novels in the Nineteenth Century (1)

太田 藤一郎

一般に小説の構成要素として考えられているものは、人物 (character)、事件 (action)、及び時間、空間である。時間、空間は、作中の人物の行為を支え、展開を可能にさせる setting、即ち背景 (環境) とも考えられる。イギリスの小説の発達を跡付けてみると、初期の物語においては、人物的要素よりもむしろ事件的要素が、物語の母体となって構成されていることが明らかである。もちろん、厳密な意味では、物語は事件的要素だけでは成立し難いものなのであるが、ともあれ、イギリスの小説は、事件を中心にした行動小説から、ルネッサンスを契機として次第に自我が自覚され、個性が尊重された結果、人間性を表現しようとする傾向が強くなって、性格 (心理) を中心とする性格小説へと変貌している。われわれが寓話物語の中で発見するように、行動小説の人物は、悪を懲らして善を勧めようとする目的にそって、それぞれ、正義の側に立つ人物と、我欲を満足させるためには、あえて正義を無視してはばからない悪人とが登場するが、是等の人物に与えられた性格は善、悪というただ普遍的な性格であって、生命のない単なる象徴にすぎない。彼等は生命感にあふれた生きた個性とはなりえないのである。これについての多くのモデルを騎士道物語や寓意譚に見うけることが出来るのである。

John Bunyan (1628~1688) の *The Pilgrim's Progress* (1678) においても、永遠の生命を求め、神の国に到達するために旅立った一人のキリス

ト信者である Christian と呼ばれる巡礼者は、City of Destruction を出発し、狭い Wicket Gate を通り、Hill of Difficulty を越え、死の影のただよう恐ろしい谷 Valley of the Shadow of Death を通過し、虚栄の品物をあきなっている虚栄の市 Vanity Fair, あるいは道をふみ迷って Doubting Castle の城主 Giant Despair に捕われ、真暗な土牢に閉じ込められ、水曜日朝から土曜日夜まで、一片のパンも一滴の水も与えられない。

こういう当時の道中の危険な行動が描写されている。この Christian をとおして、信仰の道にはいることが如何にむつかしいことであるか、そしていかにそれが大切であるか、生命の危険を冒してもなお神のおしえを求めなければならぬということが、われわれに示されている。したがって作者はこの作品の中で表現したいと企図したこういう信仰という重要な問題そのものを、作中人物に象徴化しているのであって、この人物は何等個性的な人物であることを必要としない。それ故、ことさら Christian という名前を与えているのである。Daniel Defoe (1661?~1731) の *Robinson Crusoe* (1719) においても、貿易船が暗礁に乗り上げて遭難し、ただ一人無人島に上陸した Robinson Crusoe が、生活のために必要な物資を難破船から毎日運び上げて、永い年月に亘る孤島の生活がはじまる。時には高熱におかされ、神に祈りをささげ、時には小舟に乗ってやってきた土人達が囚人を食って引きあげていく恐ろしい情景に慄然となったり、彼はこの孤島において多くの事件を経験していくのである。この作品は事件に重点がおかれていて、この事件を経験するところの人物は Robinson Crusoe に限ったことではない。実は誰でもよいのである。ただ事件の行為者であるというだけの条件を充足すればよいのであって、個性的な性格は要求されていない。

しかしながら、十八世紀になると、状況は変わっていく。書簡体の小説をかいた Samuel Richardson (1689~1761) と相並んで、イギリス近代小説の開祖だと称せられている Henry Fielding (1707~1754) は、その創作態度を明かにして、小説は封建社会の王侯貴族のための文学でもなければ、

彼等の生活がうつされたものでもない。近代庶民の創り出した文学であり、民衆の生活がうつされた文学である。したがって現実の生活取材し、庶民の実際生活を描写するためには、人間相互の性格の交渉、葛藤が主としてまきおこされる実際生活における一切の事象、人物の性格の取扱いを重要視している。彼の *The History of Tom Jones* (1749) において、作者は human nature を材料となしている。作中の hero ともいべき Tom Jones は、寓話の中にみられるような、生命感のない、現実離れのした、美化された、徳性の権化ではない。Tom は長所もあれば、欠点もある頗る現実性をもった一人の青年である。正義感が強く、豪放磊落で、人から愛せられるところの性質を持っているが、それと同時に好色的であって、多くの女性に誘惑され関係を持つ。また Tom を慕う地主 Western の娘 Sophia は、貞操を堅持しておればやがて報いられて玉の輿に乗れるというように、貞操を唯一の物質的財産と盲信し、それを婦徳だと見做していた当時の中産階級の両親たちの意見に服従していたような、個性のない娘たちとはちがう。彼女は地主 Allworthy の不愉快な甥 Blifil と強制的に結婚させられようとして、窮地におち入るが、勇敢に反抗し、養父 Allworthy に追放された愛する Tom の後を追って、家出をする美しい地主の娘なのである。Sophia を妻にめとろうとする Blifil は、その結婚によって自分の財産の増加することを狙うところの、道徳心と宗教心の篤いふりをしている、偽善的な、悪魔的な性質をもった青年であり、Sophia を手に入れんがために、Tom をおとし入れようと企む青年である。Tom と Blifil とは異父兄弟であるが、二人の性質は全く正反対である。この二人によって代表される二つの異った性質、即ち人間的価値、愛情を成就しようとする世界と、社会的地位、金銭を追求しようとする世界との戦いが、作者によって描写される。田舎を追放された Tom は各地を放浪する。彼のあとを追って Sophia が、そして彼女のあとを追って父の Western が、Allworthy が、Blifil が旅に出る。作者は旅という手法を用いて、イギリ

ス社会の全景をうつしている。この作品には多くの人物が登場するが、重要な人物は上述の二つの世界のいづれかに属して、それぞれ生きた個性ある人物として活躍するのである。

また十八世紀の作家の作品を耽読したと言われている Charles Dickens (1812—1870) は、性格の創造にすぐれた才能を示した作家である。彼は 1837年から9年にかけて *Bentley's Miscellany* 誌に *Oliver Twist* を発表しているが、孤児として workhouse で生れたこの作品の hero, Oliver Twist の性格の魅力は、作者自身の少年時代の苦しい下層階級の生活が題材としてとりあげられ、再現されたと思われる Oliver の workhouse 時代の生活にみとめられる。しかし、Oliver が workhouse や、葬儀屋の小僧生活や、London の下街の盗賊の親分 Fagin の手中からのがれ、富裕な中産階級の家庭 Mr. Brownlow の家庭に引取られてしまうと、今迄の虐待、暴行の世界に苦しみ斗ってきた少年 Oliver の特殊な性格はたちまち消滅し、一夜にして彼は何の苦勞もない、豊かな中産階級に所属する一少年に変貌する。それはまさに闇の世界から光の世界への移行ともいうべきものである。闇の世界においては、当時の社会制度の不正暴行が下層階級の無力な人達の上に加えられ、善人を犠牲にして悪人が榮えている。こういう世界において、たとえ無力であっても、善良な性格を持った少年 Oliver が激しく抵抗する。その彼の行動の中に、彼の生き抜こうとする強い生命に満ちあふれた性格を読者は発見し、彼に共感を感じるのである。しかし、光の世界においては、こういう条件はすべて必要としない。したがって、Oliver に対する読者の同情は消え失せ、Oliver が Oliver 自身でなければならぬという存在理由もなくなる。これと同じようなことが、*David Copperfield* (1849~50) の中の主人公 David についても言える。生れた時には既に父は死亡、気の弱い母と忠実な乳母とのささやかな家庭の中で育てられる。しかしこの幸福な家庭生活はながくは続かない。少年 David が乳母 Peggotty に連れられ、Peggotty の故郷に遊びに行った留

守のあいだに、母は Murdstone と再婚、それ以来 David は自分の家でありながら、苛酷な Murdstone によって虐待される苦しい生活がはじまる。彼はある時逆に Murdstone の虐待に反抗したために、鞭の教育を実行している怖ろしい小学校 Salem House に送られ、校長 Creakle に虐待される。母の病死した後は、Murdstone の経営する工業で少年労働者として働かなければならない。しかし、この工場を逃げ出した David は Dover にたどりつき、変り者の叔母 Betsy Trotwood に救われ、Canterbury の学校に送られる。学校教育をうけ、卒業した彼は自立の生活にはいい、やがては愛する娘 Dora と結婚する。David が生きた個性ある人物として活躍し、読者の興味を惹き、読者の同情を喚起するのは、彼が Murdstone によって虐待される時期の、また当時の社会の暴行のシンボルとなっている鞭の教育をうける学校時代の少年 David である。David を通して、作者の性格創造には一つの共通の pattern のあることに気付く。Dickens は無力な貧民階級に同情し、貧民の間にこそ正直と親切とがみとめられると考え、善意がすべての問題を解決するといった全く現実ばなれのした optimistic な人生観を抱いた。その結果 plot の上で現われるのは、闇の世界、即ち現実の世界から、光の世界、即ち非現実的な夢の世界への安易な転移である。現実社会において余りにもきたえられ過ぎた David が愛情をかたむけた女性は一体誰であったか。世事にうとい、家計簿もつけられないような、可憐な美しい ‘child wife’ とも言うべき Dora である。これは David の現実の世界から夢の世界への逃避にはかならない。しかしながら、この夢の世界はあくまでも夢の世界であって、これを現実の世界に引き下して実践しようとする、たちまち行き詰ってしまう。妻を教育する David の努力にかかわらず、Dora は妻の役割を果たすことが出来ない。それ故新婚後間もなく作者は Dora を病死させることによって、即ち現実の世界から除去することによって問題を処理している。この手法は現実ばなれの底抜けの善人たち、Mr. Peggotty, Mr. Micawber な

どにも看取される。イギリスの社会構成の中では生活していくことの出来ない是等の善人たちは、海外移住によって成功をおさめる。これらの善人たちはヒューモラスな言行、奇行に富んだ戯画化された人物たちである。Dickens は十九世紀 London の市井人の気質を正確に捉え、それを巧妙に再生する優れた創造力と描写力とを持っていた。たとえば、*Oliver Twist* の中に登場する教区の悪役人 Bumble の描写については、全く徹底的に悪徳役人の持つ強欲な性格を把握究明し、地位を利用して無力な者に威張りちらす役人根性をばヒューモラスな筆致で描いている。生命感にあふれた潑刺たる悪役人のモデル Bumble の人間像は、読者の心の中に強く印象づけられるだけの要素を持っている。Dickens の描写によると、Bumble はごたぶんにもれず、役人のシンボルともいふべき三角帽子をかぶり、杖を持っている。役人というものはどうも取扱注意の品物であって、何事につけても威張らせておけばよろしい。まるで馬鹿の見本のようなもので、お世辞と金、物、女にはころりとまいるらしい。虚栄心の強い人間にすぎない。それ故、本質は一番弱いのである。葬儀屋の主人夫妻の留守中、小僧と女中とが夫婦気取りの口説の場面に飛び込んできた Bumble の大憤慨、その実 Bumble 自身も Mrs. Corney と仲良くやってきたばかりなのである。受持の workhouse を巡視するときの彼の威張りぶり、そういう Bumble の役人根性をすっかり心得えている workhouse の女世話係の、まことに巧みなお世辞と懐柔策にころりと乗せられてしまう Bumble、貪欲で女たらしの Bumble と、やはり欲の皮の張った Mrs. Corney との結合、それはまさに狐と狸のばかし合いである。ある時、Mrs. Corney は、夫の Bumble に、男の特権は何ですか、とたずねる。すると Bumble は、女に命令することだ、と答える。それでは女の特権は何ですか、との質問に対して、Bumble は、男に服従することだ、と言下に答える。しかし、この二人が夫婦喧嘩の花を咲かしたとき、女の腕力はものすごく、Bumble の帽子はとび、のどはしめられ、顔はひっかかれ、髪はむしられ、その結

果「出て行け」と命令したのは妻の Mrs. Corney であり、その命令に服従して家から出ていったのは、実は夫の Bumble なのである。Bumble が威張りやの悪人であるだけに、この不首尾に読者は限りない哄笑の渦の中にまき込まれ、痛快さを覚える。この笑い、痛快さは、Dickensの描くこれらの人物たちが、充分の現実性を具え、生きているからこそ、読者の心を動かすだけの力を持っていると言える。

小説における事件の要素と性格的要素とがどのような現れ方をしているかを簡単に考察した。そこで以上の知識の上に立って、次に本稿で論じようとする背景的要素を取り上げてみたい。もし絵画の発達の歴史を三期に分け得るとするならば、絵画の第一期（古代）にあっては、背景は殆んどみられない。たとえ背景描写があったとしても、それは前景の人物にたいして、背景は何の意味も持たないのである。第二期にあっては、背景は前景の人物と関連を持ち、装飾的に工夫されている。ところが第三期になると、背景は人物と生きた関係を持つに至ったと言われている。物語の初期においては、背景的要素は、‘Once upon a time there was ...’（昔々、或る処に……）で済まされ、時間、空間は何の意味も持たないで、全く抽象的で漠然としている。時間的にはどの時代であってもよろしいのであり、また空間的にはいづれの場所であってもよいのである。ただ登場人物が活躍することの出来る時と場とがあれば充分なのである。次の段階になると、背景は人物とは直接関係がない。背景的要素は芸術上の効果を更に高めるために用いられる。たとえば、W. M. Thackeray (1811~63) の *Vanity Fair* (1847~8) においては、アルコール中毒の貧乏画家とフランス生れの歌劇女優の間に生れたところの貧しい孤児ではあるが、聡明な手管女 *Becky Sharp* と、ロンドンの富裕な株式取引人の娘として生れたが、お人好しで、むしろ愚かなとも言い得るところの *Amelia Sedley* とを中心にして、金銭と愛情との戦の中で、愚かしい喜劇を演ずる人間の俗物根性

が諷刺、嘲笑される。天涯孤独の無一文の Becky Sharp にとっては、彼女の聰明さだけが唯一の財産であって、彼女は、その利口な手管を利用して金持の男を誘惑し、その金によって社交界に出ようという意図であった。したがって、彼女の槍玉にあがったのは Amelia の兄で印度帰りの Joseph Sedley であり、Sir Pitt Crawley の次男で賭博好きの愚鈍な将校 Rawdon Crawley であった。父の破産によって一朝にして貧乏娘に転落した Amelia は、男性の愛情の庇護の下にしか生きていくことの出来ない女性であって、貧乏娘になったために彼女にたいする愛情のさめはてた婚約者 George Osborne の愛情を誤信して結婚し、Waterloo の戦で夫を失ってのちも、亡夫の愛情を盲信して15年の青春を浪費する。Becky も Amelia も長い時間の流れにそって、多くの事件を経験するが、彼女たちの性格は物語の最初から、Becky は利口な手管を弄する女性で金銭や社会的地位を求めようとしている女性であり、Amelia は保守的な、従順な、男性の愛情にすがってしか生きていけないというような女性であって、それぞれの性格は固定化、類型化されていて、発展がみられない。この作品は上流、中流階級の俗物根性、偽善、虚栄にかられたイギリス社会の実相を描き、空間の拡がりにもこの作品の構造の基礎が置かれている。

Thackeray のこういうタイプの作品の後に、われわれは背景的要素が、事件、人物と生きた有機的關係を持つところの作品を与えられるのである。そういう作品にあっては、背景は物語の不可欠な一部となり、ある種の環境からある種の人物が生み出されるとともに、またある種の環境からある種の事件が生み出されることがわかる。George Eliot (1819~80) の *Middlemarch* (1871~2) は一個人の生活にその主題がおかれているのではなくて、社会生活そのものにおかれ、作者は人間生活の複雑な機構をありのままに描こうとしている。元来別々のものとして計画された二つの物語が結合されたもので、それぞれの物語には何の関係もない。即ち一つの物語は、クエーカー宗の信者 Dorothea Brooke、彼女の夫で神話の解説に没

頭している人間的感情を欠いた初老の木石漢 Casaubon, そして彼等をと
りまく周囲の人物たちが, Middlemarch という環境から如何につくり出
されたかということを作者は詳細につたえようとしている. Dorothea は
イギリス十九世紀初頭の支配階級である地主の娘, 知的な感じ易い娘であ
り, 地主階級の女性たちとの間の扱けたお上品ぶった生活にたいして不満を
持ち, 狭い利己主義から脱け出して, 何物かを求めようとし, puritanism
と高潔な博愛主義に心を向け, 彼女の満たされない潜在力を満足させよう
として, Casaubon と結婚したのであるが, 不運にもその結婚生活は彼女
の念願を果さなかった. 夫の利己的な性格, 無味乾燥な学問に幻滅を感じる.
Casaubon は革新主義者 Will Ladislaw を嫉妬しながら死んでしま
う. 彼女は Ladislaw と結婚するが, その生活も彼女に理想を与えるもの
ではない. いま一つの物語では, 有名な解剖学者であり, 生物学の新方面
を開拓した先輩の研究を完成しようという高い目的を持っていた Lydgate
は, 不幸にも世俗的な愚かな女 Rosamond Vincy と結婚してしまう. 彼女
は夫の理想を理解することが出来ない. 彼を援助する銀行家 Bulstrode は
信心深い顔をよそおう偽善者であり, 卑劣漢であって, Lydgate は次第に
財政困難に陥り前途に希望を失った彼は, 海水浴場の無名医師となりさが
り, 遂にはジフテリアにかかり死の宣告をうける. ここに結婚と幻滅とが
示されている. 心にえがく理想は不幸なる幻想にすぎないということが示
されている. この小説は 'A Study of Provincial Life' という副題がつ
けられているが, これをみてもわかるように, この作品はイギリスの一地方
生活を描写したものである. 登場人物はそれぞれ何か有意義なことをしよ
うという理想を抱くが, 現実の社会環境の中においてはその理想もうけ入
れられないで, 次第に理想は崩壊し幻滅の深淵に投げ込まれてしまう. 即
ち人物は悲劇的末路をたどり, 作品は次第に悲劇性を帯びてくるのである.
George Eliot は, 個人の生活は更に広い社会生活によって影響され決定
されるという考をもっている. この作品には三人の反抗者がいる. 即ち

Dorothea, Ladislaw, Lydgate である。この三人の望みは、Middlemarch という社会環境の持っている価値よりも更に高い価値に支えられて生活したいということである。彼等は科学や芸術や共感の世界をとおして、人間性に寄与しようとした。けれども Dorothea は Casaubon 及び Ladislaw との結婚を媒介として、Lydgate も Rosamond との結婚を媒介として、Middlemarch の社会に敗北した。かかる意味の反抗者としては、*The Mill on the Floss* (1860) の Tulliver 家の娘 Maggie も反抗者の一人である。Floss 河のほとりにある水車小屋 Tulliver 家の長男 Tom は、世俗的、実際的な男児で、どちらかといえば頭の働きは鈍い。妹の Maggie は Tom の愛を切望している利口な、情熱的、空想的、気の強い、母親泣かせの女兒であって、小さい時から美しさに心を捉えられ、成長するにつれて次第に幸福な生活を求めたいという理想を抱き、社会の常識に反抗するのである。彼等の父は弁護士 Wakem と灌漑問題で対立、訟訴事件を起しているが、旗色が悪い。Tom は家庭教師の許に送られ教育をうけているが、Wakem の息子 Philip も同じ先生の生徒となる。二人は父親の関係もあって、親密にはなれないで反目し合う。ある日 Maggie が訪れてきて、Philip に会い、彼はせむしの不具の少年ではあったけれども、Tom になんかものを具えていることを発見する。

Maggie, moreover, had rather a tenderness for deformed things; she preferred the wry-necked lams, because it seemed to her that the lambs which were quite strong and well made wouldn't mind so much about being petted; and she was especially fond of petting objects that would think it very delightful to be petted by her. She loved Tom very dearly, but she often wished that he *cared* more about her loving him.^①

不具なるものに心を惹かれ、愛情を抱くことは、如何にその愛情が強く、深いものであるかを示すものである。立派な完全な美しいものに心を惹かれ、愛を感じるのは、普通誰でもたやすく経験することであるからである。Tom は不具を軽蔑する。しかし Maggie は Philip が不具なるが故に離

られないということを Tom に宣言する。

“The deformity you insult would make me cling to him and care for him the more.”^②

彼女のこの言葉は愛の極地である。Philip の求めていたものも美と幸福な生活にたいする欲求であった。大きな勇気を持っていた Maggie と Philip との間の親密感はや育てられ、次第に大きくなっていくが、皮肉なことに、父の Tulliver は訟訴に負けて破産、病床に就く。Tom も教育を中止して家に帰り、借金を返すために働きはじめる。Tom は Maggie に仇の息子 Philip との交際を禁じてしまう。悲しい辛いことであったが、彼女も Philip と会うことを断念する。自分の欲望をおさえ、自己を否定することによって魂の平安を願おうとするのである。彼女のこの renunciation は、小さい時からの彼女の理想を打砕いてしまう。彼女の夢は現実社会の環境に破れた。その後 renunciation は彼女の魂に静けさを、安らぎを与えたであろうか。作者は、

She had not perceived—how could she until she had lived longer?—the inmost truth of the old monk’s outpourings, that renunciation remains sorrow, though a sorrow borne willingly.^③

と言って、Maggie の心の中にやはり悲しみがただよみ残っていることを指摘している。Maggie の恋は兄に阻止され、兄によって従妹 Lucy の家に追いやられた Maggie は、そこで Lucy の婚約予定者 Stephen を知り、Maggie は Stephen によって愛される。ある日のこと、二人はボートに乗って Floss 河に遊び、Stephen は Maggie に愛の告白をする。Maggie は Stephen にたいする自分の愛情を認めながらも彼の要求を拒否する。二人の恋は世間の人達の非難の対象となり、特に Maggie にたいする風当りは冷たくきびしい。身の置きどころのない彼女は兄の友達 Bob の家に仮寓しているが、降雨がはじまり、Floss 河は増水、氾濫する。水車小屋の兄の身を案じた彼女は舟にのって接近し、兄を舟にのせて逃れんとするが、

舟もろとも濁流に呑まれ、あわれ、兄妹は抱き合った姿で溺死体となって発見される。

このように、Maggie の理想をくづし、Maggie の生命をすら奪ってしまったものは何か。それは Tom によって象徴されている世俗的な、実際の、現実社会の因習、道徳観ではないだろうか。これは人間の幸福な生活を押し流していく運命とも言うべきものであろう。Tom によって Philip との交際を禁ぜられた Maggie は、一家の幸福をおもい、自分の一切の欲望を断ち切りたいと思う。彼女の心を慰めてくれる書物すらない。彼女の心は飢に瀕する。Philip は Maggie を閉じ込めているこの運命から彼女を引き出したいと望む。詩、芸術、知識は神望で純粹である。しかし、これすらも彼女はすて去ろうとしている。それ故にこそ彼女の心の中のなやみ、くるしみは消えてはまた生じるのである。ここに人間としての感情をもった Maggie の切ない悲しさがある。不具の Philip にとっては、もし自分を愛してくれる女性があるとすれば、Maggieこそその女性である。彼女にはそうした愛情の富がある。即ち Maggie は愛情を求め愛情に生きる女性である。作品の主要人物 Tom, Maggie の兄妹は次第に悲劇的な situation の中におかれ、遂には自然の中に、setting の中に没入する。悲劇的な死によって、登場人物が自然の中に没入するこういう手法は、十八世紀や十九世紀初頭の作品には殆んど見られない手法であって、十九世紀も初期をすぎると、小説には次第に人生を、環境を、厳粛にとりあげようとする傾向が現われてきたのである。Floss 河とは何か。Floss 河は人生の流れを象徴しており、河のほとりに立つ水車小屋は、やがて人生の激流に押し流され生命を失ってしまう Tom, Maggie の薄命のシンボルではないだろうか。小説の背景として自然環境が、人間を悲劇の深淵に誘い込むような重大な意味と役割を持ちはじめたことに、われわれは注目しなければならない。George Eliot は悲劇をどのように考えていたのであろうか。Novalis の考えによると、“Character is destiny.”（性格は運命を

決する) というのであるが、George Eliot の考えによると、この言葉は必ずしも真理ではないということである。人間の生涯の悲劇は、その内部からのみつくられるのではない。性格はわれわれの運命のすべてではない。悲劇的運命は社会環境によって決せられるというように、彼女は環境の中に悲劇性を認めている。したがって、この作者は、河—人生—悲劇的運命、これをこの作品のテーマにしているのである。英文学史をひもといてみると、物語には、人間と人間との戦、人間と自然力(環境)との戦、人間と運命との戦、人間と超自然力(幽霊)との戦など、種々の戦が取扱われていることが発見されるが、この戦が物語の situation の中心となっている。そして小説の発達にともなって、場面とか、環境とかの描写に力をそそぐことは、作中の特定の人物を生き生きと表現するための手段として、小説において重要視されてきた。即ち環境がその特定の人物の行動を、事件を招くのである。特殊な環境の中からその環境の生命をうけた特定の人物が生まれ、その特殊な環境の中であって特定の行動がおこされ、事件がおこるのである。人間と環境との戦について、この *The Mill on the Floss* では、まだ環境にたいする人間の積極的な戦は展開されないで、人物は一応戦を展開し抵抗をこころみるけれども、最後には力尽きて環境の中に没入し吸収されていく。作者の George Eliot は厳格な形式的な宗教から脱却して、より自由な立場に改宗し、内縁の夫 George Lewes の影響をうけて、知的な進歩的な思想をもち、所謂 'Religion of Humanity' を彼女の思想の基調としたところの作家ではあるが、彼女は人間性の価値の偉大なることを認めながらも、一方では人間と環境との戦において、人間を征服する環境のもつ力の偉大さを肯定し、心ならずも一種の 'fatalism' におち入っているのである。

人間が、自我の自覚、人間の発見をとおして、環境との間の関係が更に強く意識され、環境のうちで文学と最も密接な交渉をもったものは、自然である。人間と自然との最も密接な関係、あるいは最も激しい闘争を描い

た作者の一人は Thomas Hardy (1840~1928) であろう。彼は Dorchester の近くの Higher Bockhampton という村で生れた。彼の父は健康で明るい石工であり、また教会のオーケストラに出ている音楽家でもあり、彼の母は土地の旧家の娘であった。虚弱で多感な Thomas Hardy は田舎で育ったが、少年時代から田舎の人達や、彼等の生活の風習や、彼等の間で伝えられてきた物語や、歌などに親しんできた。土地の Grammar School を出ると、彼は1856年に Dorchester の建築師 John Hicks の弟子になり、教会や近在の邸を復興するための設計図をかいている間に、田舎生活のメロドラマをつくり上げている色々の家庭悲劇や、家庭の歴史などを知るようになった。1862年には London に出て、建築家 Arthur Blomfield の事務所の一員となっている。彼は余暇を利用して、観劇と読書に耽り、同僚たちと神学について議論を戦わしている。しかし建築の将来に不安を覚えた Thomas Hardy は小説を執筆しはじめた。創作について、彼は次のような考えを持っている——ある時代に流れている人生観を表現するために最も適当な一連の行為をえらび出して、それを切実に、無感動に、悲劇的に表現しようと考えたのである。そして人生が一個の生物学的事実であるからには、人生を誠実に描写しようとするには、両性関係まで広く取扱うべきであり、男女の生活を正しく観察してみると、彼等は幸福に暮しているようによそおっているに過ぎないのであって、したがって男女関係が 'happy end' に終るような描写は、どうも信じられないことであり、こういう描写は避けなければならない、と言うのである。Thomas Hardy は彼の時代に流れている人生観をとらえ、人間が生きようとする自由意思をいかに持とうとしても、宇宙を支配する強大な盲目的な 'Immanent Will' によって、あやつられ、押し流されていくという思想を抱いたのである。この思想にもとづいて、人間と自然との激しい闘争が描写されたのが、彼の *The Return of the Native* (1878) である。場面——夜の闇に妖しく閉ざされていく Egdon Heath, 荒野のいづこから

ともなく忽然と生れ出た素朴な奇妙な性格を持った村の老若男女が、篝火を焚いてその周囲を踊り狂う篝火祭 (bonfire) の夜の描写によって、この劇的小説の幕がひらかれる。この夜、村人たちから離れて、かつての恋人 Wildevve をさそいよせる合図のために、Mistover Knap の丘でただ一人燃しつづける Eustacia Vye の篝火だけが最後まで燃えつづいていた。彼女は教育のある、情熱的な、気位の高い、美しい娘で、村の無知な人達から魔性の女のように畏怖されていた。居酒屋 ‘The Quiet Woman’ を経営している、利口な、無責任な、女蕩しの Wildevve は、純情な Thomasin をうらぎって、Eustacia の方に心を傾ける。我儘な情熱と衝動の権化ともいべき Eustacia の憂鬱の原因は、この Egdon の荒野に移り住んだことにある。彼女にとっては、Egdon は Hades であり、永久にそれとは融和しない。彼女は言う、

“’Tis my cross, my shame, and will be my death!”^④

彼女は今は Wildevve で辛捧しているが、この Egdon の荒野を脱出するためには、彼よりも偉大な男性の出現を期待していた。丁度この時、彼女の前に現われたのは、パリの宝石商に勤務していた Clym Yeobright である。Clym は思慮深い立派な青年であった。彼は都会生活を嫌悪し、故郷で学校を開設して子供たちの教育に従事しようという目的を抱いて帰郷してきた。Eustacia は Clym を利用して都会に出るための方法として、彼の愛情をにぎってしまう。そして彼女は Wildevve をすてる。Eustacia にすてられた浮気な Wildevve は Clym の従妹 Thomasin と結婚する。Clym は自分の計画の助手として教育のある Eustacia を考え、母に彼女のことを打明けるが、彼の母は Eustacia を怠惰な何事にも満足しない女であるとの理由のもとに反対する。

‘O, if I could live in a gay town as a lady should, and go my own ways, and do my own doings, I’d give the wrinckled half of my life!’^⑤

Eustacia が都会生活を望んでいること、家庭的な女性でないことを、

Clym は次第に気付くのであるが、もうどうする術もない。Clym は母の反対を押し切って、Eustacia と結婚し、彼等は母の家から六哩程はなれた荒野の中の小さな家に別居する。Eustacia は結婚後、夫を説得してパリ生活にもどらせようという夢を抱いていたが、夫の Clym は将来の学校経営にそなえて読書に熱中し、徹夜を続けるうち過労のため眼病にかかり半盲の状態となる。彼は生活費をつくるため、賤しい仕事と考えられているえにしだ刈を始める。自然の大地の中に自分を埋めて仕事をしている時、彼は心にうれいなく、たのしく、冷静であった。Eustacia は夫がこのような下賤な仕事をしていることに我慢が出来ないで、次第に絶望する。そして八月末のある日、村の踊見物に出かけ、Wildevé に再会、二人の交際が再燃する。Clym の母は息子を哀れに思い、息子夫婦と和解しようとする。Clym も母との和解を考えはじめる。蒸暑い八月末の日、母は Clym の家を訪れるが、Clym は早朝からのえにしだ刈の仕事につかれ切っけて部屋で午睡していた。Eustacia は Wildevé を家の中に引入れて逢引き中であつた。Eustacia は夫の母の姿を窓から見て、顔色を変えるが、Wildevé を裏口から逃がし、引返して彼女が戸を開けたときには、母の姿は見当らなかつた。Eustacia の不貞を知り、失望した Clym の母は疲労のため Clym の家からはなれた丘の上で休息している間に、足を蝕にかまれ死んでしまう。Wildevé は予想もしなかつた遺産11,000ポンドを握り、Eustacia の出発をそそのかす。母を失つた Clym は悲しみのあまり病気になるが、母の死の原因が Eustacia にあることを知つた彼は、妻を激しく非難する。そのため Eustacia は祖父 Captain Vye の家に戻つてしまう。丁度昨年夜のように篝火をたいて Wildevé をまねきよせた Eustacia は、Egdon の荒野を脱出して、Budmouth へ、そして Paris に行きたい、その節には Budmouth まで同行援助して欲しいと依頼する。十一月六日の夜、彼女は家出の決心をなし、手にさげていく荷物をまとめ、夜は次第に暗くなり嵐になりそうな気配。まだ雨は降っていない。約

東の8時、家出の決意をした合図の火を Wildevve に送る。11時半、彼女は家を出る。風雨。Rainbarrow のところに立って彼女は考えにふける。その時彼女はこれからの長い旅に必要な金を持っていないことに気付いた。この今になっても未だ彼女は金銭に縛られて、この Egdon の荒野から脱出することが出来ない。もし Wildevve から金銭の援助をうけるとするならば、Budmouth から Paris までの同行を許さなければならない。彼の情婦となって墮落することは、気位の高い彼女には我慢がならない。風雨にたたかれ、一切のものから孤立し、不運が彼女の上に重たくかぶさる。遂に彼女は降雨のため増水した川の淵に身を投げる。彼女を救助しようとして Wildevve も Clym も飛込むが、生命を失わなかったのは Clym だけであった。Egdon の荒野から脱出しようと願望していた Eustacia, Wildevve は遂にその目的を達することが出来ずに、Egdon Heath に没入してしまう。

自然現象を描くにあたって、Thomas Hardy は頗る詳細、精巧であり、彼の感覚は稀れにみるほど精密である。彼は思想を表現するために場面を象徴化する。Egdon の荒野から脱出して都会生活を求めようとする Eustacia と Wildevve の意思をはねのけ、彼等の生命を奪い、永遠に荒野の中に埋没するように運命づけたものは、Egdon Heath そのものであり、それは人間の運命を支配する強大な絶対的な Immanent Will の symbol なのである。Thomas Hardy はこの作品の劈頭、背景描写にはいり、悲劇的事件のおこる物語の時と場とを紹介しようとする。発端十一月のある土曜日の午後、たそがれの時刻が刻々と迫り、Egdon Heath として知られた広大な果てしない荒野が焦茶色に染っていく。そしてこの荒野が暗い闇の世界となっていくとき、地上の他のものがすべて眠りに沈んでいくとき、この荒野は徐々に目覚めはじめ、何か偉大な特殊なはなばなしさが始まる。

Twilight combined with the scenery of Egdon Heath to evolve a thing

majestic without severity, impressive without showiness, emphatic in its admonitions, grand in its simplicity.^⑥

たそがれは Egdon Heath の風景と相結び、威厳のある、感銘的なものを、訓戒には力強い、素朴さでは堂々たるものを、まさに生み出そうとしている。われわれは Egdon の荒野が何か神秘的な偉大な力を持っていることを感じる。この荒野のもつ強烈さは、厳粛なもの (the solemn) によって支えられているのであって、華美なもの (the brilliant) によって支えられてはいない。これは Egdon の荒野の特質をまことによく表現している。そしてこの強さは冬の暗さ、嵐、霧のさなかにえられる。Egdon Heath にとっては嵐は恋人となり、風は友となる。

Civilization was its enemy; and ever since the beginning of vegetation its soil had worn the same antique brown dress, the natural and invariable garment of the particular formation. In its venerable one coat lay a certain vein of satire on human vanity in clothes.^⑦

……gave ballast to the mind adrift on change, and harassed by the irrepressible New.^⑧

この描写によっても明かなように、文明は Egdon の荒野にとってはまさに敵であり、荒野の素朴な生活を嫌悪して都会の華やかな生活を望む人間が、その生命を失い、荒野から離脱出来ないということ、荒野はその昔から不変の衣をまとっていること、その古色蒼然たる一枚の衣に、衣服に見栄をはる人間の虚栄心を嘲笑する諷刺が秘められているということ、また荒野は、変化を求め、おさえがたい新しいものを求めて煩っている人間の心を落ち着かせもするのであるという結論に到達する。ここにわれわれは、この物語の環境 Egdon Heath が生きた一つの生命体としての存在であり、強力に人間に君臨していることを理解するのである。そしてこの Egdon の荒野は、夜の闇のとばりがおりはじめると同時に、徐々に目覚めて活動をはじめめる。即ちこの小説に起る人間と人間との間の、また人間と環境との間の離合とか、重大な事件とかいったものは、その殆んどが荒野の夜の

訪れとともに始まり、まるで夜の花の開くように、夜の闇の深まっていくにつれて、不思議に深く熟していくのである。Bonfire を合図にした Eustacia と Wildeve との密会、Clym の家で行われた身振り狂言の仲間に加わって Eustacia が Clym に接近したこと、さんさんと降りそそぐ月光をあびて丘の上に立った Clym、やがて月蝕がはじまり、これが Clym と Eustacia とのかねての逢引のあいずの時刻、暑気と蝮の毒によって Clym の母が息を引取っていったこと、Egdon Heath からの脱出が不可能であることを知り、絶望した Eustacia が風雨の激しい川の淵に投身自殺したこと、——こういった人間の社会生活で最も重要な問題である情愛と生死とに関する出来事が、殆んど夜の闇の中で奇しくも結ばれ進展しているということである。Eustacia が男たちと交渉を持つときには夜の闇である。次に Clym と Egdon Heath との関係を考察してみよう。

Clym had been so inwoven with the heath in his boyhood that hardly anybody could look upon it without thinking of him.^⑨

作者のこの描写によっても判然としているように、少年時代の Clym は Egdon Heath ととけ合っていたのである。その Clym が Egdon の荒野を離れて、一度は Paris に出て宝石商人になったのであるが、彼は宝石商というものは最もぐうだらな、最もむなしい、最も女々しい仕事であると自覚し、故郷の Egdon Heath に帰って学校を開設して貧乏な無知な子供たちの教育に専念しようという考を抱いた。

He walked along towards home without attending to paths. If anyone knew the heath well it was Clym. He was permeated with its scenes, with its substance, and with its odours. He might be said to be its product. His eyes had first opened thereon; with its appearance all the first images of his memory were mingled; his estimate of life had been coloured by it;

ClymこそEgdonの荒野を知っている人物であり、Clymこそ荒野がつくり出したものであるとも言えるかも知れない。ここで荒野にたいする Eustacia の言葉と、Clym の言葉とを比較してみよう。

‘I cannot endure the heath, except in its purple season. The heath is a cruel taskmaster to me’^⑪.

これは Eustacia の言葉であり、彼女と荒野とは仇敵であり、荒野は冷酷な監督者である。これを聞いて Clym は、

‘Can you say so?’ he asked. ‘To my mind it is most exhilarating, and strengthening, and soothing. I would rather live on these hills than anywhere else in the world.’^⑫

と言って、彼の心境を明かにしている。このようにこの二人は全く異質的な存在でしかない。故郷の貧しい子弟の教育にたずさわろうとした Clym の理想が何故崩壊したのであろうか。それには三つの理由が発見される。幾夜も続いた徹夜の読書のため眼病にかかり、半盲の状態になったこと；妻 Eustacia の協力を得られなかったこと、そして荒野自身が文明とか教育というものを敵として、たやすく受け入れようとはしなかったことである、この最後の理由については、‘Civilization was its enemy;……’という記述によってもわかるのであるが、Egdon Heath にはその精神がある；即ち素朴な田舎的なものであって、これはまた Egdon の荒野に生れ育った村の住民たちの素朴純真な精神でもある。たとえば、荒野に生れた Christian Cantle が何故女にもてないのか、その原因は彼が生れたとき月が出ていなかったためである、と彼も住民たちも信じている、そういう非文明的な迷信が生じ、またそれが支配的な勢力を持っている荒野なのである。そういう素朴、無知な住民の生活様式を、Clym は教育によって変化向上させて、多少とも都会的な要素を注入しようと考えたにほかならない。これは田舎的な要素と都会的な要素との衝突である。Egdon Heath はそこで都会的な要素、即ち Clym の理想を拒否したのである。Clym の抱く理想は Egdon の環境にそぐわなかったのである。環境のもつ精神に反し、彼の理想の崩壊した Clym が半盲の状態になったということは、Egdon の荒野に永遠に結びつけられるという深い意味をあらわすものであり、も

し彼が眼病にかからなかったなら、Eustacia の情熱と虚栄とに敗北して、彼は再び Egdon の荒野をはなれて、華やかな都会に出ていったにちがいない。Clym を誘惑して都会に暮そうという計画に失敗した Eustacia の悲劇は、彼女が Egdon Heath と調和しなかったことと、Clym の帰郷である。彼が Egdon の荒野に帰ってきたということは、彼女にとっては一つの運命的な要素となる。そして彼女の悲劇的な死は、荒野から脱出しようとする彼女の意思に反して、荒野の中に彼女もまた没入することになる。このように環境としての Egdon Heath は、この物語の場面であるとともに、物語の plot を支配し、登場人物の性格と運命とを決定するのである。(未完)

註

- ① George Eliot, *The Mill on the Floss* (London: Everyman's Library, 1960), p. 165
- ② *ibid.* p. 327
- ③ *ibid.* p. 271
- ④ Thomas Hardy. *The Return of the Native* (London: Macmillan and Company Ltd., 1958), p. 98
- ⑤ *ibid.* p. 108
- ⑥ *ibid.* p. 4
- ⑦ *ibid.* p. 6
- ⑧ *ibid.* p. 7
- ⑨ *ibid.* p. 198
- ⑩ *ibid.* p. 205
- ⑪ *ibid.* p. 220
- ⑫ *ibid.* p. 220